

菊池氏の活躍を支える者

― 使者、八幡宗安の活躍 ―

武田昌憲

はじめに

元弘三年（一一三三年）三月十三日、菊池氏による鎮西探題への攻撃、すなわち博多合戦が行われたのであるが、同盟軍の大夫・少貳の離反で菊池軍は壊滅的な打撃を受けたのは歴史上でも名高い。その合戦直前に、使者として大夫・少貳の間を往来し、最期には討たれてしまう菊池氏の家臣がいた。『太平記』ではたまたま八幡弥四郎宗安と出ているだけで、特に人名を出さなくてもよいと思われるのだが、関係者からすると、人命が記されるだけでも名譽の記事と言えるだろう。その背景を少し、探ってみた。

使者 八幡宗安

鎌倉幕府打倒の戦乱のさなか、九州でも討幕の動きが加速された。

中でも肥後国の菊池氏の動きが活発化。九州の有力大名、少貳氏と大夫氏と協力して鎮西探題を討つ約束をしていた。が、いざ、挙兵を促すと、・・・『太平記』巻十一「筑紫合戦九州探題の事」（西源院本・兵藤裕己校注 岩波文庫）では、以下のように記す。

かねての約諾に任せて、少貳、大夫がもとへ事の由をぞ触れたりける。

大夫は、天下の落去未だいかなるべしとも見定めざりければ、分明の返事に及ばず。少貳はまた、その比、京都の合戦に六波羅常に勝に乗る由を聞いて、己が咎を補はんとや思ひけん、日頃の約を変じて、菊池が使ひ八幡弥四郎宗安を討つて、その頸を探題の方へぞ出だしける。菊池入道、大きに怒つて、「日本一の不覺人ども

を憑んで、この一大事を思ひ立ちけるこそ越度なれ。よしよし、其の人々の与力せぬ軍はせられぬか」とて、三月十三日の卯刻に、わづかに百五十騎にて、探題の館へぞ押し寄せける。

鎮西探題の動きを悟った菊池は、内諾のとおり、少弐と大友に拳兵を伝える。『太平記』諸本では、使いの者は、八幡弥四郎宗安である。大友との交渉では、大友から協力の返事はもらえず、少弐にいたっては、菊池の使者の八幡弥四郎本人がうたれてしまい、証拠として八幡の首を探題に差し出してしまふ。完全に探題方であることを表明している。

『博多日記』（岡見正雄校注 角川文庫『太平記』（一）付録）では、八幡宗安の活躍は三月二十三日の記事に載る。

その前の記事から記すと、

「正慶二年三月十一日、肥後国菊池二郎入道寂阿博多ニ付キ畢ル。同十二日出仕之時遅参之間、不_レル_レ可カラ_レ付クニ着到ヲ一之由、侍所下広田

新左衛門尉ト問答之間、及ビニ口論ニ一畢ル。同十三日刀（寅）時、博多ノ中所々ニ付ケ_レ火ヲ燒キ払フ。寂阿ガ築州、江州ニ立テニ使者ヲ一申シ云フ。宣旨ノ使ニ罷リ向ヒ候、急ギ可_レキ有ルニ御向ヒ一之由触_レ廻ル。築後入道ハ、堅槽ニテ此ノ使ニ人ガ頸ヲ切り、十三日夕方被_レ進ゼニ匠作ノ方ニ一。江州ハ可_レキニ打止ム一之由被_レ仰セ之間、彼ノ使逐電シ畢ル。

寂阿（菊池武時）が築州（少弐妙恵）、江州（大友具簡）に宣旨の使者を派遣するも、少弐は二人の使者の首をとり匠作（探題北条英時）に進呈する。が大友の方は討ちとどめようとしたが、逐電されてしまったとある。地元、熊本県山鹿市の熊入り温泉の伝説では、この時、大友が打ち漏らした使者こそが八幡弥四郎のようである。

次いで、合戦後の二十三日の記事。

「同日院宣所持ノ仁、八幡弥四郎宗安ト云フ物被_レ切ラ_レ頸ヲ。即チ被_レ懸ケ畢。銘ニ云フ、先帝

ノ院宣所持ノ人八幡弥四郎宗安ノ頸ト云々。此レハ去ル廿日御所ノ陣内ニシテ院宣ヲ大友殿ニ奉ル^レ付ケ之間、即チ召^ニ捕ルト之ヲ^一云々。院宣六通帯^ニ持ス之ヲ^一。大友、筑州、菊池、平戸、日田、三窪、い上六通云々。」

後醍醐天皇の院宣を六通、それぞれ大友（豊後国）、筑州（少弐・筑前国）、菊池（肥後国）、平戸（肥前国）、日田（大隅国か、同書に大隅国御家人日田肥前權守入道が載る）、三窪（薩摩国か）に届けるために活動していた八幡が、大友のところに向き、そのまま召し取られたことになっている。院宣は六通以外にも、すでに有力武士何人かに手渡ししているのかもしれない。鎌倉幕府・鎮西探題からすれば八幡はもともと厄介な存在だといえる。

これらの戦いは、菊池が大友・小弐に事前に知らせることなく探題館を討てば勝利は得られたはずである。『太平記』では探題北条英時が菊池に追い込まれ、自害直前まで来たとき、少弐・大友の大軍六千騎が救援に駆けつけ菊池の背後を襲い、探題の窮地

を救うのであった。まさに菊池の悲劇というしかない。

地元の伝説

熊本県山鹿市は県内有数の温泉郷として知られる。『保元物語』でも活躍する、宇野七郎親治がこの地に配流されたとき、山奥に鹿が湯に浸かるのを見て、温泉を発見したことから山鹿温泉の名がついたといわれる（『山鹿市史』上巻、昭和六十年）。その隣に八幡弥四郎宗安の見つけた熊入り温泉がある。

熊入温泉の由来には以下のように掲げている

「当温泉は人皇九十五代花園天皇の

御世（六八三年前）隈入城（龍爵城）

主八幡弥四郎宗安の発見に由るもの

である。宗安は菊池公に仕え豪強を

以って聞こえ菊池武時公北条英時を

博多に攻むるに当り宗安の強勇に

して忠誠なるを以って選ばれ元弘二年

（六三四年前）三月 後醍醐天皇の命を

承け菊池少貳大友以下六人に賜わ

った勅書を奉じ大友貞宗の館に使

したるに約に背きたる大友のために

欺捕され重き刀傷を負い遂に武勇を

戦場に揮うこと能わず辛うじて帰城し

この出で湯で治癒したと言われる

その由来に因り子孫が大衆のために

浴場を開き以来幾多の栄枯盛衰を

克服し今日の熊入温泉に至っている

平成二十五年十月吉日

（熊入温泉センター「温泉の由来」による）

九州での討幕戦の最初の記事に、八幡宗安の活躍が記せたことは、この地の人々の誇りとなったことだと思われる。

大友氏へ使者として向かった八幡は、大友に討ちとられそうになり、重傷を負いながらも辛くも生還でき、自分が発見した熊入りの湯で戦傷を癒し、再び院宣の使いとして出かけ、ついに三月二十日に捕らえられて、二十三日に斬られてしまった、とみる

こともできそうである。また三月二十日に大友に捕まったとしながらも抜け出て、熊入りに戻ったとも想像できるが、この場合、さらされた頸の問題が残る。偽頸まで考えると考えすぎかもしれない。ともかく、八幡は先帝・後醍醐天皇の宣旨を九州にもたらした忠臣の一人というべきであり、『太平記』で簡単に取り上げられ、読み飛ばしてしまい、次の博多合戦や、菊池親子の別れ、いわゆる「袖ヶ浦の別れ」に目が向きそうであるが、地元での扱いは想像以上のものである。

現在でも、八幡弥四郎宗安の子孫の方（三森、中原、船津、永田）が、温泉を維持されている。効能の最たるものに、外傷性諸障害（鹿本郡誌 全「昭和四九年」）がある。八幡が自分の本拠地で刃傷を癒せた伝説も首肯できるだろう。熊入り城（隈入城・龍爵城）は八幡の居城の可能性が高い。この辺りを支配するには適地である。江戸期は湯治場として繁栄した。地名としては、熊入り村等が合併して、八幡村が一時存在。八幡地区に市立八幡小学校がある。同市杉にある日輪寺は菊地武時が正和五年（一一三六）に再

興したとされ、武時の供養塔や武時の娘（了心素覺尼）の墓もある。八幡の命日には供養するという。

『太平記』に名前が記されたのも、「太平記」作者や菊池氏との深いつながりあつてのことであるだろう。地元から菊池氏へ、菊池氏から太平記作者へ記事の提供なども想像して見ると面白い。おそらく『博多日記』のような記事から再構成して、博多合戦後の八幡の最後を博多合戦前の、菊池武時の怒りの発露として取り上げたのであろう。

使者として

『太平記』のこの九州探題討伐の段を見みると、使者の登場が目立つことに気づく。

使者を殺めて、鬱憤、仕返しの対象とする、気の毒な対象である。また、一方では、使者として送り出されることだけでも武士の本懐・名誉なことであるかもしれない。

さて、菊池が鎮西探題討伐に失敗してから、世間の情勢が官方優勢になっていく。

この部分、天正本『太平記』（新編日本古典文学全集・

小学館）では、

さて少弐・大友が今度の振る舞ひ人にあら
ずと。天下の人口に惡み警られながら、暗知ら
ずして世間の様を聞き居たりける程に、五月
十七日兩六波羅責め落され、千早の寄手も南都
へ引き退きぬと聞えしかば、少弐入道、「こはい
かがすべき」と仰天す。思案の内に、「さらば探
題を誅ち奉つて、我が身の咎を助からばや」と
思ひければ、まづ菊池肥後守と大伴入道が許へ
使者を遣つて相語らふに、菊池肥後守思ひける
は、同心の体にて、先の様に出し抜いて、怨を
報ぜんと思ひけるが、いやいやそれまでも怵へ
かたし、こここそ以前の憤りを散ずるところな
れとて、少弐が使を食し取りて首を斬り、「探題
を誅ち給ふは、その戦場にて見参すべし」と返
事して、父の最後の鬱憤をしばらく散じぬと悦
んで、嘲る事限りなし。大友は、我も咎ある物
なれば、かくしてもや助かると、堅く領状して
けり。

傍線部分が天正本の独自記事で、西源院本は「菊池は先に懲りて、耳にもききいれず。」と記すだけである。使者の安否は記さない。天正本の菊池の少弐に対する恨みは、使者の首をとるくらい、深いものであったことがわかる。

一方、探題の北条英時も少弐の動静が気になり、使者として長岡六郎を送る。長岡六郎については「福岡県筑紫野市（筑前国御笠郡長岡郷）の武士」（西源院本『太平記』・岩波文庫186ページ中による）説があり、八幡弥四郎のように地元の伝説が眠っているかもしれない。

長岡六郎の最後は以下のように『太平記』（西源院本）に永遠に記されることになる。

英時、少弐が陰謀の企てを聞いて、「事の実否を伺ひ見よ」とて、長岡六郎を少弐がもとへぞ遣られる。（中略）新少弐は何心もなげに出で合ひたり。長岡、座席に着くと均しく、「まさなき人々の謀叛の企てかな」と云ふままに、腰の刀を抜いて、新少弐に飛んで懸かる。新少弐も、あくまで早き者なれば、傍なる将棋の盤を

取って、突く刀を請け支へ、長岡にむずと組んで、上を下にぞ返しける。やがて少弐が郎従ども、あまた走り寄り、上なる敵を三刀差いて、下なる主を助けければ、長岡、本意を達せずして、忽ちに命を止めてけり。

使者の最期の記述が、そのまま使者への供養になる気持ちがかかる場面である。

（続く）